［3］　日南市小体連

Ⅰ　年間事業

期　日	曜	事　業　名	主　な　内　容	会　場
5月8日	水	第１回南那珂地区教科等研究会	・事業報告 ・役員選出 ・今年度の研究について	北郷小中学校
5月２３日	木	第１回理事会	役員選出、年間活動計画審議 水泳記録会実施の検討	潟上小学校
～7月１７日		水泳記録会(各校で実施)		各小学校
7月２４日	水	第２回理事会	陸上記録会実施の検討　　主題研究	潟上小学校
9月１２日	木	第３回理事会	陸上記録会の集計　　　　主題研究	潟上小学校
１１月２２日	金	南那珂地区教科等研究会	研究授業　３年「プレルボール」 吉永　悠　教諭 事後研究会	南郷小学校
～１１月２９日		陸上記録会(各校で実施)		各小学校
１２月　５日	木	第４回理事会	陸上記録会記録集計　主題研究	潟上小学校
2月２０日	木	第５回理事会	研究紀要作成　年間反省	潟上小学校

Ⅱ　事業部のあゆみ

１　水泳記録会

（1）　大会名　　日南市小学校水泳記録会

（2）　期日　　令和６年７月１７日（金）までに記録をとり、７月２４日（水）の理事会で認定を行う。

（3）　会場　　日南市各小学校

（4）　参加者　　日南市内小学校５・６年児童

（5）　種目　　○　種目
　２５ｍ自由形、５０ｍ自由形　２５ｍ平泳ぎ、５０ｍ平泳ぎ
　２５ｍ×４　リレー　　　　　それぞれ男女別で実施

（6）　競技方法
　○　一人**２種目以内**（ただし、リレーは除く）とする。※リレーに出場する児童は最大３種目。
　○　その距離をその泳法で完泳できるものとする。
　○　リレーのチーム編成については、小規模校に限り、異学年、男女混合でも可とする。
　　※　５・６年生合同で編成する場合は、「６年チーム」としてのエントリーとする。
　　※　男女混合で編成する場合は、「男子チーム」としてのエントリーとする。
　○　記録測定方法は「宮崎県上位入賞者記録認定要領」に準じて行う。
　○　ストップウォッチは、２個で計測し、遅い方のタイムとする。
　○　百分の一以下は切り上げる。　(例) 52 秒 31→52 秒 4
　○　自由形の泳法は、クロールとする。

（7）　表彰　各学校の各種目５位までに記録証を配付する。

（8）　反省
　○　授業の時間が確保できるようになったため、完泳できる児童が増えた。しかし、過去３年間の水泳時間の減少により、依然として泳力は低い傾向にある。

２　陸上記録会

（１）　大会名　　日南市小学校陸上記録会

（２）　期日　　　令和６年１１月２９日（金）までに記録をとり、１２月５日（木）の理事会で認定を行う。

（３）　会場　　　日南市各小学校

（４）　参加者　　日南市内小学校６年生児童

※　学校規模により、５年生の参加を認める。ただし、リレーに参加する選手でトラック競技のみとする。

（５）　種目　　　１００m走　　５０mハードル走　　４００mリレー　走り高跳び　　走り幅跳び
持久走（女子８００m、男子１０００m）　　ソフトボール投げ

（６）　競技方法

- ○　選手種目については、タイムレースとする。
- ○　１人が出場できるのは、２種目＋リレーとする。
- ○　スパイクの使用は禁止する。
- ○　その他細部については、日南市小学校体育連盟による競技規則を適用する。
- ○　１００mの直線をとることができない学校では、カーブを用いて測定する。
- ○　８００m、１０００m及び、４００mリレーの距離を正確にとれない施設では、無理に記録を測定する必要はない。ただし、学習の一環として記録を測定することは勧める。

（７）　表彰　　　各学校の各種目５位までに記録証を配付する。

（８）　反省

- ○　運動場の状況が学校によって異なるため、同じ条件で記録測定をすることが難しかった。
- ○　体力テストの結果や授業の中で計測した記録を上げるなど、年間指導計画をもとに準備・実施した学校もある。今後、その実践をもとに他校も年間指導計画の見直しなども行っていきたい。
- ○　複式学級を有する学校、小規模校では職員数に限りがあり、記録の計測をすることが困難な面もある。
- ○　計測するための用具が足りない学校があった。
- ○　日南市小体連から配付する記録証を、水泳記録会と陸上記録会と両方で使うことができるようにすることで、余りがなくなるようにした。

（９）　その他

- ○　記録測定に必要な用具、器具等を小体連で購入したり、学校間で借用したりしながら実施する必要がある。各学校の用具器具の有無、数などを把握し、一覧にまとめて活用していきたい。

Ⅲ　研究部のあゆみ

１　研究主題・副題

> 児童が思考・判断・表現しながら技能を向上させる授業の在り方
> ～指導と評価の一体化を意識した授業改善を通して～

昨年度は串間・日南地区で学体研が開催されたこともあり、日南市小体連も思考ツールの活用に焦点を絞って研究を行った。特定の領域などを設けず、教員が体育科授業を行う中で使いやすそうな思考ツールを使用し、その効果や反省点を出し合った。学体研も終わり、今後の研究の見通しのために、体育の授業をする上での困り感を出し合った結果、様々な意見が挙がったが、つきつめると「単元及び１単位時間にあたりに身に付けさせたい力が明確になっていないことが原因ではないか」という結論になり、本主題を設定した。そこで、本年度は児童の技能を向上させる授業改善に焦点を絞って実践をしてきた。

２　研究仮説

指導する事項や評価の規準・評価方法を明確にして、授業の中で扱う教材を精選するとともに、問題解決的な学習を展開することで、思考・判断・表現しながらその単元で必要な技能を向上させることができるであろう。

3　研究の実際

（1）　教材シートの作成

まず学習指導要領をもとに、指導する事項や評価規準と評価方法を明確にし、その明確化した評価規準などをもとに、単元で扱う教材を精選してきた。この二つを行うことにより指導者自身が、何ができれば良いのかを把握することができ、指導者や児童にとって無理のない授業につながると考えた。

①　**指導要領**
指導要領に書かれている領域の３つの観点それぞれの「何ができればよいか」を具体的に記す。

②　**備考　次の発達段階での指導**
次の学年でできればよいものを無理のない指導につなげるために記す。

③　**教材名**
単元で扱う教材名を記す。

④　**場の様子**
教材の場づくりの例を記す。

⑤　**ルール**
達成につながるルールの設定。児童の実態に応じて、生涯スポーツの観点などから調整可能なルール等を記す。

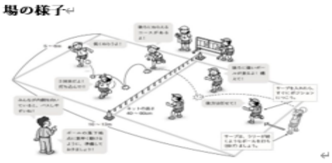
体育科　教材シート

日南市小学校体育連盟

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
指導要領	①　いろいろな高さのボールを片手、両手もしくは用具などではじいたり、打ちつけたりする。相手コートから返球されたボールの片手、両手、用具での返球 ②　ボールの方向に体を向けること、もしくは、ボールの落下点や操作しやすい位置への移動	①　規則を工夫したり， ②　考えたことを友達に伝えたりする。（規則の工夫は、誰もが楽しくゲームに参加できるように，プレイヤーの人数，コートの広さ，プレイ上の緩和や制限，得点の仕方などの規則を選ぶ。） 以下の項目は別の単元で指導 ・簡単な作戦を選ぶ	①　規則を守り誰とでも仲よく運動をする ②　場や用具の安全に気を付ける 以下の項目は別単元で指導 ・勝敗を受け入れる ・友達の考えを認める ・運動に進んで取り組む
備考 次の発達段階で指導	高学年では、自陣中央から相手陣へのサービス、味方が受けやすいボールをつなぐ、相手が捕りにくいボールの返球を指導	高学年では、仲間の考えたことを他者に伝えるところまで指導する	高学年では、ルールを守り助け合って運動する。場や用具の安全に気を配ることができるように指導する
評価規準 おおむねよい姿	①　相手コートから飛んできたボールを片手、もしくは両手を使って打ち付けることで、味方にパスしたり、相手に返球したりすることができる。 ②　ボールの方向に体を向けたり、ボールの正面や操作しやすい位置へ移動したりすることができる。	①　誰もが楽しくゲームに参加できるように，プレイヤーの人数，コートの広さ，プレイ上の緩和や制限，得点の仕方などの規則を選んでいる。 ②　動作や言葉、絵図などを用い　て考えたことを友達に伝えている。	①　規則を守り、誰とでも仲良く運動しようとしている。 ②　場や用具の安全に気を付けている

教材名
プレルボールを基にした易しいゲーム

場の様子



ルール １試合５分
○　バドミントンサイズのコート（横６ｍ×縦１２ｍほど）で、４０～６０㎝の高さのネットを使う。
○　１チーム５～６名
○　ボールに触ることができるのは１人１回。３回で返球する。
○　サーブは、下手投げで投げ入れる。サーブでミスをしても点数は取られない。（ラリーを楽しむため）
○　相手コートからから来たボールが自陣でバウンドする前か後に、第１触球者が床に打ち付ける。
○　味方へのパスは自陣で床に打ち付けてつなぐ。
○　相手コートへの返球も、自陣で１回打ち付けて行う。
○　得点をとったらローテーションする。

児童の実態に応じたルールの工夫
○　第１触球者キャッチあり＆第２触球者のキャッチ後の歩きあり
○　第１キャッチ＆第２キャッチ後の歩きなし
○　第１キャッチなし＆第２キャッチ後の歩きなし
歩きなしが入るとポジショニングを意識する必要がでるが、「プレイ開始時の定位置でのポジション取り」は中学生での指導事項であるため求めすぎなくてもよいと考える。

【　図１　】　体育科　教材シート

（２）　授業研究会

令和６年１１月２２日（金）に授業実践を行い、研究仮説の検証を行った。

領域	単元名	学年	授業者
Ｅ　ゲーム	プレルボール	第３学年	南郷小学校　吉永　悠　教諭

6/8時間目の授業を行った。目標を「得点につなげるために作戦を選ぶことができる」と設定し、チームで作戦を選んで、ゲームを行うことで課題の解決や技能の向上を目指した。

授業開始時、児童はチーム毎に準備運動やドリルゲームを行うようにしていた。ドリルゲームの内容は、３年生の段階で身に付けさせたい技能を意識して「パス&キャッチ」「ラリー」「輪くぐり(輪っか地点に移動し、手で作った輪にボールを入れるゲーム)」など行い、チームで点数化して、成果を「仙人の道しるべ【図２】」で確認できるようにすることで、技能の高まりをチームで楽しめるようにした。

【　図２　】　研究授業の様子

話合いでは、ロイロノートで作成した作戦ボードを活用し、作戦を選ぶことができるようにしていた。ゲームの後は、作戦の振り返りをすることで次のゲームにつなげるようにしていた。その中で、自分は作戦をうまくいかせるためにどのように動くべきかを考えながら動く児童もおり、本研究主題である「思考・判断・表現しながら技能を向上させる」様子も見ることができた。

４　研究の成果と課題

（１）　成果

○　教材シートがあることで、必要以上に技能を求めることがないので、指導がしやすくなった。

○　評価をする上で、効果的である。

（２）　課題

○　毎時間作成となると時間もかかり負担となることも考えられるが、このような考え方はとても大切だ。

○　教材シートの中で高めたい技能毎に、どのようなドリルゲームをするかを記すことでより効果的に活用できる。盛り込みたい要素が他にもあるが、ワンペーパーで確認できるように内容を精選したい。